

此採合は、**飯に防風**にして、**即花**にあらしむるを、
防風東風とさかせたるなり、

砂糖蜜の拵方

白砂糖二百匁、水二合、玉子白味半分、まつ玉子の白味ばかりを分て半分だけを、二百匁の砂糖の鍋のなかに入て、水一合を合せて抄子にて掻ませて炭火にてとくべし、さてふき上る時に、水五勺ほどを入る、次にふきたる時鍋をふるしおくべし、**扱五分間**ほどおきて、あくの固りたる時、抄子にてすくひ去り、又鍋を火にかけてよく時水を入れ、又ふく時おろしらくべし、**扱絹篩**にて漉すべし、**甘露水**、又は**煮物**、菓子**の銀玉糖**などの原料はつかふ物なり

奇妙な動植物

在高師 田寺寛 一一



一寸考へて見ますと、植物などは唯ずべく／＼と大きくなつて何の心持もない様ですが、深く調べて見ますとなか／＼面白い仕組になつてれるものがあります、殊に動物などは一層巧妙に出来てゐまして、調べて見れば調べて見る程面白くてなか／＼やめられませぬ。それで私はこれから暫くこの欄の餘白を借りまして續々奇妙な面白い動植物の事についてお話し上げませう。

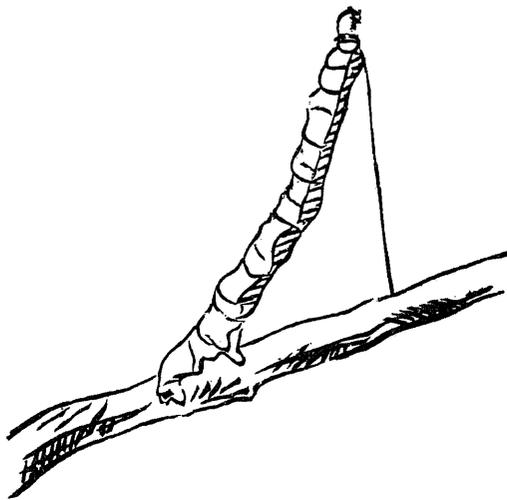
先づ初めは動物の方ばかり申しまして、それか

ら後に植物の方にうつることゝしませう。

(一) ペントウコワシ

此虫はシャクトリムシのことです、此虫は細長い箸の折の様な虫で、歩む時には尻を頭の處まで持つて行きまして、此部分の足でしつかりと物を握り、それから頭を延ばし頭の處の足で前方の物体をつかみ、また尻の處を頭に近寄らせて物を握り頭を前に進めるといふ風で丁度御婦人がモノサシで反物をお計りになるのと能く似ております、それでシャクトリムシといふ名がついたのです。このシャクトリムシは甚だ奇妙な性質を持つてゐます、それはどうかといひますと此虫が休むとか眠むつてゐます時はいつでも口から一筋の糸を出しまして、圖にかいてある様な位置にとまつておきます。そしてその体軀の色合はどうかと申しま

すと、その虫がとまつてゐる木によつていろく違つてゐります青い木であれば青い色をしてゐますし、枯れた木であれば其枯木の色と同じ様な色



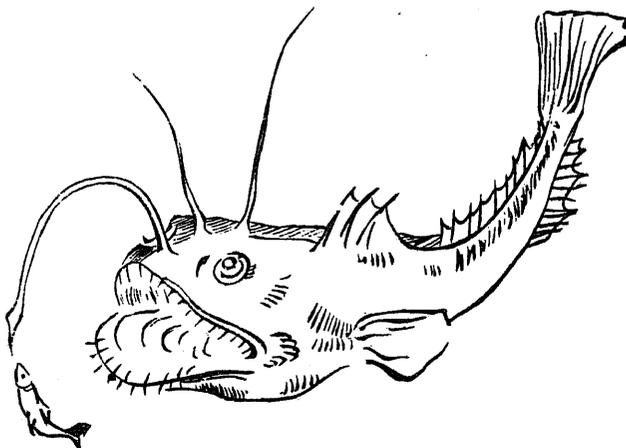
をしてゐます。それで一寸みると木の枝の折れ残りの様に見えます、これが面白い處であります

此様に木の枝の折れ残りの様にみえるのは、此虫が生活をうまくやつて行く上に於てなかく深い理由がある所であります。なぜかといひますと若しこの虫がこの木と違つた色をして唯ぼんやりと止まつてゐましたら、外の強い虫が来まして直ぐ食つてしまいます。しかしこの虫が木の枝に似せてゐますから、外の強い虫か見てもこれは木の枝だとかもうて寄りつきもしません。

それで度々面白い事柄が起ります、桑摘をしておられる御婦人方が朝早くから桑畑へいつて、急いで辨當を木の枝へかけようとしられると、枝はころりと折れて辨當が毀れてしまふ事が度々あるそうです、これからしてこの虫の名をベントウコワシといふのです。

(二) 魚を釣りにて食ふ魚

アンコウといふ魚は大きな口を持つてゐる極不恰好な魚



この様なものが附いてゐます

頭の上
まして
であり
好な魚
極不恰
口を持
大きな
アンコウ
といふ魚
は

この魚は常に砂の中にひぐり込んで身をかくして
ゐまして唯頭だけを砂の上へ出し静かにこの鬚を
動かしてゐます。そうしますとこの鬚の先端につ
いてゐます肉の切の様なものは静々動きまして丁
度小さな虫の様に見えます

これを他の小さな魚がみますとよい食物があると
おもつてそつと此肉切を食いに参ります、すると
アンコウは段々この肉切を自分の口の近くへ持つ
て参りまして魚を口元へ誘ひ來り不意に此魚を捕
つて食います。

(未完)



史傳

大題小題 二

サーモビレーの戰 (承前)

米

溪

レヲニダス、サーモビレーに至るや、フラニシ
ヤ人、オータ山の栗林を通ずる山徑に付て告ぐる
所あり。且つ其の山上の高臺、森深くして地凹め
る故、之を發見するは、決して容易の事にあらず
到底、敵軍の見出し能はざる所なることを保證し
其の地點を守らんことを請ひしかば、レヲニダス
之を許しぬ。斯くて營を温泉水清き流を繞り
て張り、破壊せる往古の城壁を修覆し、専ら會戰